『伊勢物語』東下りと東国章段

―「むさしあぶみ」について―

近藤さやか

［キーワード　①『伊勢物語』　②第十三段　③武蔵鐙　④東国　⑤東下り］

はじめに

『伊勢物語』には、第七段から第九段までの「東下り章段」に続き、東国が舞台となる第十段から第十五段までの「東国章段」がある。東国が舞台となる点では、物語後半の第百十五段と第百十六段も含まれる。第百十五段・第百十六段は、従来「後から加えられた」とされている段である。この二つの段は「陸奥の国」を舞台とし、第十四段・第十五段と共通する。また、塗籠本では、第百十五段（「おきのゐて」歌を持つ段）は、第十五段の後に位置し、「東国章段」としての配列になっている。第百十六段に相当する段はない。

本論では東国章段の中央に位置し、「陸奥の国」に舞台が移る直前にある第十三段の「武蔵鐙」について考察してみたい。

一、東下りの理由

『伊勢物語』はそれぞれの段が「むかし」[注1]と始まる。段ごとに完結した形を取るため、独立して読むことも可能である。しかし、初冠に始まり終焉で終わる「男」の一代記といわれるように、各段は他の段との関連をもって配列されており、決して一つの段だけを取り出して解釈できるものではない。東下り章段・東国章段とひとまず分けられるが、連続させて解釈すべきである。諸本により、段の配列は異なるが、適宜比較しつつ、本論では天福本を中心に考察していく。

そもそも「男」が東国まで行ったのはなぜか。東下り章段の第七段には、「京にありわびてあづまにいきけるに」、第八段では「京やすみ憂かりけむ、あづまの方にゆきて、すみ所もとむとて」、第九段では「その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり」とある。「男」が京に居場所をなくした具体的な内容は描かれないが、東下りの前には二条后章段がある。第三段から第

六段には「男」と二条后の悲恋が描かれている。第六段は以下の通りである。

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに来けり。芥河といふ河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籙を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉が何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものを

これは二条の后の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、后のただにおはしける時とや。

第六段のいわゆる〈後人注〉に「まだいと若うて、后のただにおはしける時とや」とある。入内前の二条の后、つまり藤原高子との逃避行に失敗し、居辛くなった京を離れ、東に旅立ったという流れに読める。注意したいのは、実際に在原業平が二条后と恋愛関係にあり、引き裂かれて東国へ下ったということではなく、『伊勢物語』ではそのように読める、ということである。

「男」と在原業平を重ねてみるならば、官位が十三年停滞したことが指摘される。『続日本後紀』によると嘉祥二年（八四九年）一月に従五位下に任じられた以降、『日本三代実録』の貞観四年（八六二年）三月に従五位上に叙せられるまで、十三年も官位が停滞していたとされる。また、業平は父を阿保親王、母を伊都内親王とする生まれである。阿保親王は、父である平城上皇が目論んだ平城京遷都、弘仁元年（八一〇年）の薬子の変に連坐し、太宰府に十四年も流される憂き目にあった。平城上皇の崩御により、天長元年（八二四年）帰京が許される。『続日本後紀』によると、承和元年（八三四年）二月に遠江国敷智郡古荒田廿三町を拝領している。翌月三月には上野太守に、承和九年（八四二年）正月に上総太守となっており、東国との関わりを持つ。

こうした関連から雨海博洋氏は、東国に「すむべき国」として求めた一つとして、「父との縁深き上総の国とみることができるのではあるまいか。九段には、男が駿河から武蔵国に入り、武蔵国については何もふれることなく、いきなり武蔵と上総と

の境の隅田川に場面が移っているのも、下総から上総への意図があるからである[注2]」と指摘する。東下りの旅程は、『闕疑抄』で第八段の「浅またけにたつけぶり、いせ尾張の方よりは見えまじきか。昔は煙の過分に立けるものにてこそ有つらめ[注3]」とあり、実際に旅をしたのか否かも問題とされている。『伊勢物語』という作品内において、事実か否かを問いただす必要はない。従って、武蔵国に触れずに上総と下総の境界を流れる隅田川に至ることに、父阿保親王と縁深い上総を忍ぶ在原業平の影をみることもないだろう。「東国」という空間に向かう「男」は〈在原業平〉の影を負ってはいるものの、業平ではない。阿保親王を通じた東国との縁は、業平の影の一つでしかない。

隅田川に場面を移すことについて、本田恵美氏に「「住むべき国」を求めて「すみだ河」の辺りを彷徨う東下り」との指摘がある。また、「六段との関連で七～九段を読むならば、東下りの旅とは、所謂芥川の段で鬼に一口に食われ露のようにはかなく消えてしまった女を求めての旅、という解釈も可能ではないか。それは、すなわち、東＝吾妻を求めての旅であった。」とも述べている[注4]。「東」は『古事記』に東征の帰途、日本武尊が弟橘媛を思い「吾妻はや」と嘆いたことから「あづま」と呼ぶようになったという話が知られる[注5]。日本武尊とは貴種流離譚としての共通点もあるが、「男」は「吾妻」を求めて東へ旅立つ。それは音に注目した歌が詠まれる東下りの旅として見逃せない指摘である。

以上を踏まえて、第九段を見てみたい。

二、東下りの核・第九段

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道しれる人もなくて、まどひいきけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげにおりゐて、かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり。

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道は、いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬ

なりけり

富士の山　を見れば、五月のつごもりに、雪いと白うふれり。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国のなかにいと大きなる河ありけり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、はしとあしと赤き、鴫の大きさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

『伊勢物語』のある段を取り上げるだけではなく、前後の段を見る場合、未だ避けては通れない問題として、成立論がある。有名な片桐洋一氏のいわゆる「三段階成立論」（『伊勢物語の研究〔研究篇〕』明治書院　一九六八年）では、この九段は『古今和歌集』以前の原初形態なる『伊勢物語』から存在したものとされている。論者は「三段階成立論」には賛同しかねる考えである。業平歌かどうか、など違いがあっても、一回的にまとめられた作品であると考えている。冒頭の「むかし」で揃えた表現や、「男」の人生を一代記風の流れにしている点を見過ごしてはならないだろう。

それとは別に、この第九段について言うならば、この段を核として東下り章段ができ、東国章段が続いたものだと考えられる。「段階」という時間を隔てたものではなく、素材として先にあったのだ。それは第九段には詠まれた四首の歌の内、最初の「から衣」の歌と四番目の「みやこどり」の歌が『古今和歌集』四一〇・四一一番歌（巻第九・羇旅歌）にあることからもわかる。

四一〇

あづまの方へ友とする人ひとりふたりいざなひていきけり、みかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるに、その河のほとりにかきつばたいとおもしろくさけりけるを見て、木のかげにおりゐて、かきつばたといふいつもじをくのかしらにすゑてたびの心をよまむとてよめる

在原業平朝臣

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ

四一一

むさしのくにとしもつふさのくにとの中にあるすみだ河のほとりにいたりてみやこのいとこひしうおぼえければ、しばし河のほとりにおりゐて、思ひやればかぎりなくとほくもきにけるかなと思ひわびてながめをるに、わたしもりはや舟にのれ日くれぬといひければ舟にのりてわたらむとするに、みな人ものわびしくて京におもふ人なくしもあらず、さるをりにしろきとりのはしとあしとあかき河のほとりにあそびけり、京には見えぬとりなりければみな人見しらず、わたしもりにこれはなにとりぞととひければ、これなむみやこどりといひけるをききてよめる

名にしおはばいざ事とはむ宮こどりわが思ふ人はありやなしやと

『伊勢物語』第九段は、『古今和歌集』に二首並んだ和歌を核となる素材にし、三河の国と武蔵の国と下総の国の間を埋めるものとして、駿河の国の歌「駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬなりけり」「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ」を入れたと考えられる。[注6] 第九段に限らず、「現行『伊勢物語』「東下り」の諸章段が、同一作者の手によって、殆ど一回的に制作されたものであろうとする見方」の河地修氏[注7]の論にあるように、東下り章段はそれぞれ照応関係にある。河地氏は歌枕に対する解説的性格、第七～九段の冒頭表現を照応の論拠としているが同様の照応関係は、東国章段でもいえるのではないだろうか。

三、東下りの先の東国

佐藤裕子氏は第十段から第十五段の前後関係について、第十一段は内容的関連性のない地縁的関連のみで位置しているとして、他の章段とは別にするものの、「東国章段は、単に地縁的な関連のみではなく、内容的関連性を求めた配列がなされている注8」と論じている。佐藤氏の論では、東国章段の中でも、第十一段を除いた五つ段の関係を対象としているが、少し視界を広げて考察してみたい。

まず第十段である。

むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。このむこがねによみておこせたりける。すむ所なむ入間の郡、みよしのの里なりける。

みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる

むこがね、返し、

わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつ

か忘れむ

となむ。人の国にても、なほかかることなむやまざりける。

「吾妻」を求めて向かった東で、武蔵国に至った男は、第十段で「武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり」と武蔵国の女に逢う。「母なむ藤原なりける」と母方が藤原氏という展開は、同じく藤原氏であった女性・高子の二条后章段を思わせる。「あてなる人」である男を「むこがね」にと願う母から和歌が届く。積極的な母親の賛成を得るのである。第六段で「女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを」とあった時とは逆に障害なく進む。「人の国にても、なほかかることなむやまざりける」という一文は、京での二条后との恋を仄めかしてもいる。

第十一段で「友だちども」に手紙を送る話が置かれ、第十二段では「人のむすめ」を盗む。

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、ぬすびとなりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかに置きて、逃げにけり。道来る人、「この野はぬすびとあなり」とて、火つけむとす。女、わびて、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれも

こもれり

とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

第六段と同じく女を盗み、失敗する話形である。この「人のむすめ」を第十段の娘とみる必要はないだろうが、藤原氏の娘・女を盗むというこれらは「あたかも二条后との恋愛の繰り返し」[注9]である。続く第十三段は、第十段をもとに解釈されることが多い。第十三段の全文は次の通りである。

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」と書きて、うはがきに、「むさしあぶみ」と書きてをこせてのち、音もせずなりにければ、京より女、

武蔵鐙さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふも

うるさし

とあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

問へばいふ問はねば恨む武蔵鐙かかるをりにや人は死

ぬらむ

「武蔵なる男」が対称的な「京なる女」に「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」という何ともどかしい内容の判然としない文を書く。ここで和歌の形は取らず、加えて奇妙なことに「うはがき」に「むさしあぶみ」とのみ書き送るのである。従来、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」の内容については、『勢語臆断』[注10]でいうように、第十段で「母なむ藤原なりける」女の婿となったことを指す。

とりわけこの第十三段については、「武蔵鐙」の解釈について問題とされる。「さすが」を鐙に取り付ける留め金具である「刺鉄」として、『愚見抄』[注11]以降、「さすがに」「かくる」を「あぶみ」の縁語とする説、「逢ふ身」をかける説[注12]などがある。長井彰氏は「「あぶみ」は「足踏み」の意であり、鞍の両側で乗り手の足を支える馬具である。「あぶみ」は、また、「逢ふ身」を掛け、武蔵国の女と「逢ふ身」となったことを知らせるものである。左右二つに分かれる「鐙」の意と重ねると、武蔵の国の女と「京なる女」[注13]とに、それぞれ心の引かれる男の気持ちが込められていよう」という。山本登朗氏は「京の女性を心に「かけて思ふ」、すなはち今でも心に「かけ」て恋しく思っているということをそれとなく暗示するために足を「かけ」るものである「あぶみ」[注14]を持ち出したものとする理解が、もっとも妥当ではないか」と述べる。

信友の随筆『比古婆衣』[注15]に、この第十三段の「武蔵鐙」について「馬の胸さきをさし廻してものする足蹈なるべし」とし、「名義むさしとは胸さしの約まれる言なり」としている。『伊勢物語古意』[注16]には、『古今和歌六帖』二八五七番歌（第五［ふみたがへ］）に「さだめなくあまたにかくるむさしあぶみいかにのればかふみはたがふる」の歌を指摘している。武蔵鐙の形状から踏み違ふることをいう。第十三段との関連を考えると、「踏み」と「文」をかけると解したくなるが、深読みだろう。『古今和歌六帖』と『伊勢物語』との前後関係は未だ謎のままであり、この歌がどれほど知られていたかも不明である。

「武蔵鐙」の実態について探り、理解しようとする論が多いが、もっと単純に捉えてみてはどうだろうか。

四、京なる女

男が「むさしあぶみ」と書き送ったのは「京なる女のもと」である。男は第九段の東下りの途中でも、京へ向かう修行者に「京に、その人の御もとにとて」と文を書くのである。ここで「御」とあることに注目し、高貴な女性が想定され、その先には東下りの発端の事件として連想させられる二条后の姿が浮かぶ。ここでは「京なる女のもと」とあるように「御もと」ではない。男を必ずしも業平と見る必要がないように、女も二条后として見る必要はない。

例えば、『伊勢物語』では、第六十九段で斎宮との恋が描かれ、伊勢を舞台とする段が続くが、これらは「二条后章段」と同じレベルで「斎宮章段」とは呼びがたい。第七十段は「狩の使よりかへり来けるに、大淀のわたりに宿りて、斎の宮のわらはべにいひかけける」、第七十一段は「伊勢の斎宮に、内の御使にてまゐれりければ、かの宮に、すきごといひける女」、第七十二段「伊勢の国なりける女」、第七十三段「そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女」というように、相手が斎宮からずれていくのである。第七十四段で「女をいたう恨みて」と会えないことを恨み、第七十五段で「「伊勢の国に率ていきてあらむ」といひければ」と「世にあふことかたき女」を伊勢へ誘う。第百二段と第百四段では尼になった斎宮が

登場するが、斎宮との恋が描かれるのは第六十九段のみである。忠実に相手の女を斎宮からずらし、ぼかしていく。会いがたい女としての側面を残像として後段が引き継いでいる。[注17]

このような手法が二条后章段から東下り章段へ、また東下り章段から東国章段へというところでも使われているのではないだろうか。つまり、二条后章段の後に続く東下り章段の第九段では「御もと」として高貴な女性を想定させ、二条后の影が色濃い。しかし、第十三段では「京なる女のもと」である。「御」が外れ敬意が弱まるが、「京の女」という点では第九段の「御もと」と表現された女と共通する。繰り返すが、第十三段の「京なる女」＝二条后と解したいのではない。二条后からずらされ、ぼかされてきた先にいる「京なる女」なのである。

この女は「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」と書かれ、上書きに「むさしあふみ」とだけ書かれた文をもらい、男の状況を知る。「むさしあふみ」から「男」が「武蔵」にて「逢ふ身」となったことを察したのだろう。ここには、第九段で男が修行者に託した文に書かれた和歌「駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬなりけり」に対応しているのではないか。駿河では「夢にも人にもあはぬ」と言っておきながら、男は武蔵で「逢ふ身」となった。

先に述べたように、「むさしあふみ」が詠まれた和歌はあるが、どれほど流通したかも不明である。「武蔵鐙」の特殊な形状から「踏み違ふる」を引き出す説もあるが、武蔵の国の馬具である「鐙」の形状について、「京なる女」が知り得るだろうか。鐙であるから「かける」という言葉くらいはでてくるだろう。「むさしあふみ」とのみ上書きにある文、「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」と三十一文字の和歌にまとめ上げることもできないくらいの男の困惑を、単純に女は「武蔵逢ふ身」の意味で受け取ったのだろう。その解釈の布石として、駿河から贈られた「夢にも人にもあはぬなりけり」が置かれている。

もちろん、この駿河から贈られた和歌を受け取った人物として「京なる女」を特定することもない。ここでの女に求められるのは、教養と物わかりの良さである。というのも、続く第十四段では物わかりの悪い陸奥の国の女が登場するからである。第十四段は次のようにある。

むかし、男、陸奥の国にすずろにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちに思へる心なむありける。さてかの女、

なかなかに恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけむ、いきて寝にけり。夜ぶかくいでにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、男、京へなんまかるとて、

栗原のあねは[注18]の松の人ならばみやこのつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひをりける。

武蔵から陸奥へ舞台を移した男は、「そこなる女」からみやびとはかけ離れた和歌を受け取る。男を「京の人」として見る女には、雅に対する雛という構図が露骨に表れている。第十三段の「むさしあふみ」という言葉から男の状態を察した「京なる女」と、第十四段では鳥が鳴いたと嘯き去る男の言葉を信じ、「栗原のあねはの松の人ならば」と人並みの女なら京の土産に誘ったのにという男の和歌の意味を勘違いして喜ぶ女は対称的である。[注19]

男の文の「聞ゆれば恥づかし、聞えねば苦し」、女の和歌の「問はぬもつらし問ふもうるさし」、男の和歌の「問へばいふ問はねば恨む」の言葉の呼応関係についても多くの指摘がある。久保朝孝氏は互いの〈心〉を京に残しながら〈身〉が武蔵にある男の乖離を障害として〈身〉と〈心〉意識を指摘する。[注20] 第九段でも「身をえうなきものに思ひなして」とあることから、〈心〉を京へ残して〈身〉を東へと向かわせたことがわかる。

第十五段で東国章段は一旦終わる。第十四段で「京へなんまかる」と言っていることから、東国には遂に「すむべき国」は見つけられず、京へ帰るようである。しかし、第十五段も陸奥の国を舞台とする。

むかし、陸奥の国にて、なでふことなき人の妻に通ひけるに、あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく

女、かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を見ては、いかがはせむは。

「なでふことなき人の妻」という平凡な男の人妻に通う男は、そんな男の妻になっているのは不思議な女だと見て、「心のおく」が見たいという和歌を贈り、女は「かぎりなくめでたし」と思う。しかし、女の「さるさがなきえびす心」をみてどうするのだという段である。これも〈心〉を京に残して〈身〉だけ東国に彷徨う男と見るのならば、女の〈心〉を見たところで、男の〈心〉は京にあるのではないかということになろうか。塚原鉄雄氏が「栗原章段（第一四段）では、女性が、男性を理解しえない。理解しえないだけではなく、理解しえないことをも理解しえない。そして、忍山章段（第一五段）では、男性が、女性を理解しえないのである」[注21]というようにここにも対応関係がみられる。

さて、ここまで東国章段をみてきた。東国章段の中であまり他の段との関連性が指摘されない第十一段について最後に触れたい。第十一段は次のような段である。

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よ

りいひおこせける。

忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

位置的には東国章段に置かれながら、「あづまへゆきけるに」「道よりいひおこせける」と東下り途中のような状態で、「友だちども」に和歌を詠むという短い段である。東下りは「友とする人、ひとりふたり」（第八段）、「もとより友とする人、ひとりふたり」（第九段）とあるように「友」との旅であったが、京へ残してきた「友だちども」に対する思いが詠まれる。

同歌が『拾遺和歌集』にある。「たちばなのただもとが人のむすめにしのびて物いひ侍りけるころ、とほき所にまかり侍りとて、この女のもとにいひつかはしける」と「たちばなのただもと」が女に詠んだ歌となっており、ここでは恋愛歌であった。雨海博洋氏は「橘忠幹」が天暦九年（九五五年）に駿河介在任中に賊によって殺された人物であることから、駿河の国という東国との関連、悲惨な事件の被害者となったことで、この歌があわれなものとして「歌語り化」したものとみている。[注22]

この段は「友だちども」に和歌を「いひおこ」すのであるが、東から京の人へ文を送るという点で第十三段と共通する。友への関係が恋愛関係に似たものとして描かれることは論じたことがあるが、[注23]ここでも「めぐりあふ」までと「あふ」という言葉が使われている。遠く離れて逢えない状態であるため、再び逢うまで自分のことを忘れないで欲しいと思うことは自然であろうが、第九段、第十一段と京へ送る文にはすべて「あふ」という言葉が含まれている。第九段では夢にも現実にも会えないことを嘆き、第十一段では再会を前提とした「あふ」だが、第十三段の「むさしあふみ」を「逢ふ身」と解する流れはここにもある。

加えていうならば、東国章段としての括りでみると、第十一段は確かに浮いているように感じる。「友だちども」に和歌を詠みおこすだけの短い段である。しかし、第十段で順調に母親の賛成を得て進んでいた人のむすめとの恋が、この第十一段を挟んで第十二段になると、娘を盗み武蔵野へ逃げる展開へとなっている。ここにも二条后章段と似た構図がみえる。第五段を参照したい。

むかし、男ありけり。東の五条わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、かどよりもえ入らで、わらはべの踏みあけたるついひぢの崩れより通ひけり。人しげくもあらねど、たび重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜ごとに人をすゑて守らせければ、いけどもえあはでかへりけり。さてよめる。

人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとにうちも寝なむ

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してけり。二条の后に忍びて参りけるを、世の聞えありければ、兄人たちの守らせたまひけるとぞ。

忍んで通っていた築地の崩れに関守をおかれた男が和歌を詠み、その和歌の効果によって「あるじ許してけり」と一旦は許される。先に引いた第六段では、一転して女を盗み、芥川まで逃げることになる。東国章段では、第十段と第十二段の間に、第十一段がおかれることにより、繰り返し述べてきたような二条后からのずらしとぼかしが行われているのではないだろうか。つまり、第五段と第六段は相手の女が〈後人注〉により、二条后と特定される。女との関係を一旦は許されるものの、女を盗み出そうとし失敗する第十段と第十二段は間に第十一段を挟むことで、「母なむ藤原なりける」女を盗んだという女を固定化しないずらしが行われる。そして、京にいる友だちへ自分を忘れないでほしいと詠む第十一段は、第十三段への「京の女」への手紙の布石でもある。[注24]

おわりに

第十三段の「むさしあぶみ」が第九段で詠まれた「駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬなりけり」に対応しているのではないかと指摘した。二条后章段／東下り章段／東国章段というように、章段に区切った範囲で読まれることが多いが、前後の段だけではなく作品全体を見通した形で読むと、対応・比較・反転した表現が他の段との関係がみえてくる。

今回は、第百十五段・第百十六段を含めた考察まで至らなかったが、「陸奥」には初段で引かれた「みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに」と源融の歌がある。第八十一段では、その源融こと「左のおほいまうちぎみ」邸で「かたゐ翁」が「陸奥の国にいきたりけるに、あやしくおもしろき所々多かりけり。わがみかど六十余国の中に、塩竈といふ所に似たるところなかりけり。」と「陸奥の国」を共有した塩竈を見出す段がある。『伊勢物語』における「陸奥の国」については、稿を改めたい。

『伊勢物語』は成立の問題によって分断されて読みがされてきた作品であるが、細かく分断するのではなく、初冠から終焉までを描いた作品全体の中で配列の意図を汲みとり、今一度、他段と連繋させた関係に目を向けることでみえるものがあるのではないだろうか。

『伊勢物語』の本文は小学館の新編日本古典文学全集による。『古今和歌集』などの歌集は新編日本国歌大観による。

注

1　天福本第十七段のみ「年ごろおとづれざりける人の」で始まる。池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究（校本篇）』によると、古本系承久本・大島本系神宮文庫本・塗籠本系不忍文庫本・群書類従本・丹表紙本には「昔としころ」で始まる本もある。

2　雨海博洋「『伊勢物語』における「東国物語」の形成基盤」（『平安朝文学研究』二巻六号　一九六八年十二月）

3 堀内秀晃・秋山虔校注『新日本古典文学大系　竹取物語・伊勢物語』（岩波書店、一九九七）付録の「伊勢物語闕疑抄」（細川幽斎著　文禄五年成立　寛永十九年版本五巻二冊）の翻刻。

4 「「いとどしく過ぎゆくかた」の系譜―『伊勢物語』七段から『源氏物語』へ」（『古代中世文学論考』一三　新典社　二〇〇五年二月）

5 小林正明氏が「東国の旅程で「なれにし妻」「夢にも人」「わが思ふ人」「をちこち人」など詠出する昔男には「あづまはや」と絶唱したヤマトタケルの神話的原型が残響しているかもしれない。」としている。（「伊勢物語を読む」鈴木日出男編『別冊國文學　竹取物語伊勢物語必携』學燈社　一九八八年）

6 『伊勢物語』の和歌と類似が多く指摘される『古今和歌六帖』第二〔山〕八三八に「するがなるうつのを山のうつつにも夢にもみぬに人のこひしき」、第一〔ゆき〕六八七に「時しらぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらむ」がある。平井卓郎『古今和歌六帖の研究』（パルトス社　一九九一年）では、「古今六帖の歌の中には伊勢物語と直接間接に関係あるものが七十一首も存する」とし、A六帖の歌が伊勢物語から採られたと思はれるものB伊勢物語と六帖の歌とが系統を異にすると思はれるものC伊勢物語の歌と六帖の歌とが無関係であると思はれるものD六帖の歌が年代的にみて最も後になると思はれるもの、と四分類する。この歌については分類例にない。

7 河地修「伊勢物語・東下りの生成」（『伊勢物語論集：成立論・作品論』竹林舎　二〇〇三年）

8 佐藤裕子「伊勢物語「東国物語」の配列意識」（『国文学研究』七十八号　一九八二年十月）

9 渡辺泰宏「伊勢物語章段群論」（『國文學　解釈と教材の研究』第四十三巻二号　一九八八年二月）

10 監修：久松潜一・築島裕（他）編集『契沖全集　第九巻』岩波書店　一九七四年

「きこゆれははつかしきこえねはくるしとは、さきにたのむの雁とよめる一段の心、人のむことなれりとみゆれは、京にちきり置きし人に、さる事ある身なれは、音つれ聞えさせむも、思はむずる所はづかしく、さりとて音つれさらんも、くるしとなり。」

11 塙保己一編『続群書類従　第十八輯上』続群書類従完成会　一九二四年

12 渡辺実『新潮日本古典集成　伊勢物語』（新潮社　一九七六年）には「今もあなた（京の女）をかけて頼む」の意と解く人もあるが、それだと「鐙↓懸ける↓かけて頼む」というふうに縁語を挟む迂遠さがあり、直接の掛詞「逢ふ」を考えるのが自然だろう」とする。山本登朗「「東下り」の物語・その二―十三段その他をめぐって―」（『伊勢物語論：文体・主題・享受』笠間書院　二〇

○一年）によると、『堯恵加注承久三年本校合伊勢物語』以来、「聞ゆれば恥づかし」を第十段でむこがねとなったことを指す解釈とあわせて示されたとする。

13 「『伊勢物語』一三段における都鄙対立―武蔵鐙の男の自己分裂」（『解釈』三十七巻八号　一九九一年八月）

14 山本登朗「東下り」の物語・その二―十三段その他をめぐって―」（『伊勢物語論：文体・主題・享受』笠間書院　二〇〇一年）

15 林陸朗編集・校訂『比古婆衣　上・巻七』現代思潮社　一九八二年

16 『賀茂真淵全集　第十六巻』続群書類従完成会　一九八一年

17 伊勢の国を舞台にした第七十～七五段は第六十九段を中心に生成され、その構造が東国章段に類似することを福井貞助氏（『伊勢物語生成論』有精堂　一九六五年）が指摘している

18 底本は「あれは」で「ね」の旁書がある。通常、武田本をもって校訂される。

19 女を比較する表現は第二十三段の「いとよう化粧じて」、「風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」と他の女のもとへ出かける夫の無事を願う健気な妻・大和の女と、「はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて、笥子のうつはものにもりける」高安の女が顕著である。化粧の有無が分かりやすい対比である。また、この第二十三段に続く第二十四段では、三年間夫を待ち続け、「いとねむごろにいひける人」と新枕を交わす晩に夫が帰ってくるという構図も対称的である。男一人に女二人の第二十三段、女一人に男二人の第二十四段という設定と、第二十三段の大和の女は夫を待ち取り戻すが、第二十四段では待つことを諦め別れる展開になる点が対称的といえる。

20 「『伊勢物語』第二十四段考―殉愛とみやび返し―」（『淑徳国文』二十六号　一九八四年十二月）

21 「勢語東国と勢語陸奥」（『伊勢物語の章段構成』新典社　一九八八年）

22 前掲。雨海博洋「『伊勢物語』における「東国物語」の形成基盤」（『平安朝文学研究』二巻六号　一九六八年十二月）

23 拙稿『伊勢物語』における「友」・「友だち」（『学習院大学國語國文學會誌』五十二号　二〇〇九年三月）

24 さらに東国章段後の配列に目を向けるならば、第十段から第十五段までの東国章段の後におかれた第十六段では「紀の有常」と「ねむごろにあひ語らひける」仲である「男」の「友だち」関係が描かれる。恋愛章段の間に置かれ、第三十八段では戯れに疑似恋愛歌を贈答しあうような「友だち」の有常登場の伏線ともなっている。

（こんどう・さやか　博士後期課程）